

○普及に移す技術

[タイトル] 秋どりネギにおけるネギハモグリバエの発消長と粒剤を用いた重点防除時期

[要約] 葉先の白化等の著しい被害をもたらすネギハモグリバエB系統は8月末から急増することから、8月下旬の粒剤防除は不可欠である。生育期の株元処理粒剤としてネオニコチノイド系及びジアミド系の薬剤、あるいはこれらの混合剤の効果が高い。

[キーワード] ネギハモグリバエ、ネギ、殺虫剤、粒剤、重点防除時期

[担当場所・課] 農林水産総合技術センター・農業研究所・病理昆虫課

[連絡先] 電話 076-429-5249

[背景・ねらい]

近年、秋どりネギにおいてネギハモグリバエの集中的な加害による葉先の著しい白化被害（図1）が問題となり、2019年には県内の主な産地で、従来（A系統）とは異なる系統（以下、B系統）の発生が確認されている。被害は生育期後半で特に著しいものの、本県における本種の発生消長は明らかになっていない。一方、ネギは生育期に、粒剤を中心とした防除が多数回行われることから、効率的な防除が求められている。そこで、本種の発生や被害実態に応じた粒剤の重点防除時期や有効薬剤を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 成虫は5月中下旬から発生し、8月末から急増する。幼虫の食害による被害は生育期間を通して見られるが、9月中下旬に著しく多くなる（図2）。
- 2 8月下旬の粒剤防除を省略すると、収量・品質が低下する（図3）。
- 3 粒剤はネオニコチノイド系（ベストガード、ダントツ、スタークル）及びジアミド系（プロロッソ）、両系統の混合剤（ミネクトデュオ）の効果が高く、25日程度効果が持続する（図4）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 薬剤抵抗性の発達を防止する観点から、異なる系統の薬剤をローテーションで使用するとともに、使用にあたっては登録内容を遵守する。
- 2 粒剤の株元処理後に降雨が少ないと、薬効が発揮されない場合があることから、状況に応じて液剤による追加防除を検討する。
- 3 供試した粒剤は、いずれもネギアザミウマあるいはアザミウマ類に登録があるため、両種の同時防除ができる。

[具体的データ]



図1 ネギハモグリバエB系統の幼虫による重症被害（9月中旬頃）

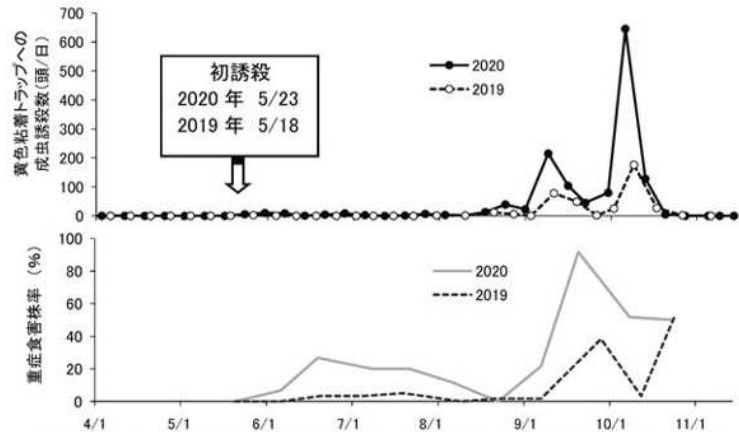


図2 ネギ圃場におけるネギハモグリバエ成虫誘殺数（上）と重症食害株率（下）の推移（2019、2020年）

注) B系統の発生が確認されている農研内のネギ無防除区での調査、品種:夏扇パワー、定植:2019年 4/18 2020年 4/16、黄色粘着トラップは両面2枚の合計値を日当たり換算重症食害株率:調査株における重症株(発生予察基準における食害痕程度3と4)の割合

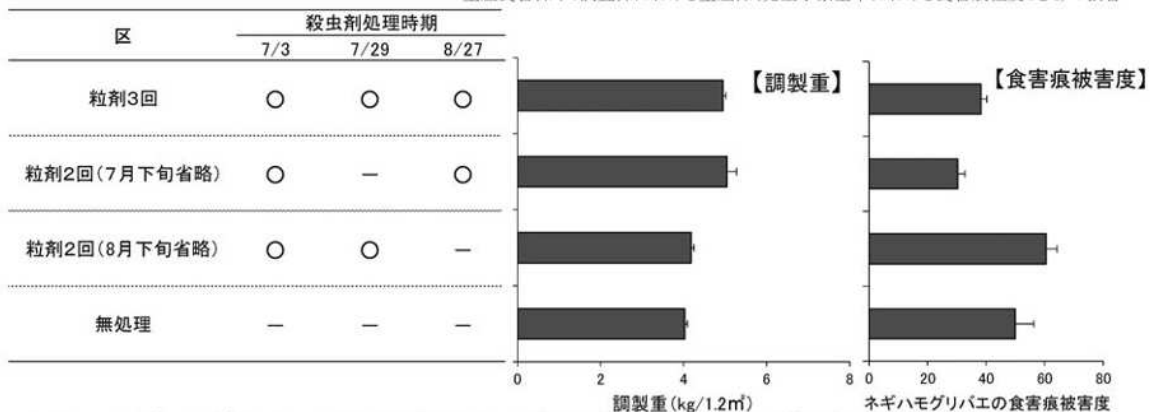


図3 ネギハモグリバエの粒剤処理時期・回数と調製後の重量及び食害痕被害度（2019年）

注) 品種:夏扇パワー、定植:4/18、処理殺虫剤:ベストガード粒剤6kg/10a、収穫調査:9/26に各区1mを掘取り調製後に重量と食害痕を0~2の被害程度別に区分し被害度を算出、エラーバー:標準誤差

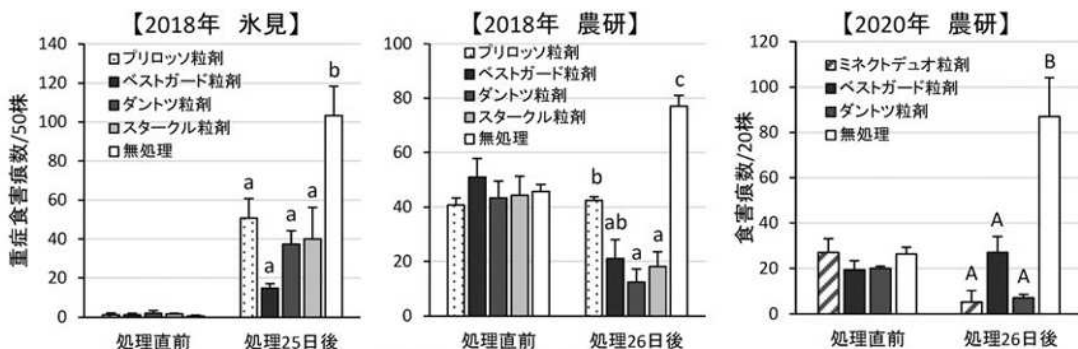


図4 生育期の各種粒剤の効果（2018、2020年）

注)【2018年氷見】品種:ホワイトソート、定植:4/23、処理:6/15、全葉調査 【2018年農研】品種:夏扇パワー、定植:4/17、処理:6/14、全葉調査
【2020年農研】品種:夏扇パワー、定植:4/17、処理:6/18、中心展開2葉調査
各剤 6 kg/10aを土寄せ時に処理、食害痕数:ネギハモグリバエ幼虫による食害痕の数、重症は長さ3cm以上の食害痕
各試験において異なる英小文字間には5%水準 英大文字間には1%水準で有意差あり(Tukey 法)

[その他]

研究課題名:園芸微小害虫の制御に関する研究 1)ネギ類における微小害虫の制御技術の確立
予算区分:県単(革新技术開発普及事業)
研究期間:2020年(2018~2020年度)
研究担当者:向井環、青木由美、黒田貴仁
発表論文等:第64、65回日本応用動物昆虫学会にて発表